

平成18・19年度 文部科学省
「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

事業報告書

言語科学国際共同研究の カリキュラム化

コンソーシアム協定に基づく
若手研究者の育成

平成18・19年度 文部科学省
「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
事業報告書

言語科学国際共同研究の カリキュラム化

コンソーシアム協定に基づく
若手研究者の育成

2008年3月
南山大学人間文化研究科
言語科学専攻

「言語科学国際共同研究のカリキュラム化」事業報告書

目次

第 1 章 概要	1
第 2 章 事業報告	9
2.1. 協定校紹介	9
2.2. 活動リスト	15
2.3. 言語学領域	35
2.3.1. コンソーシアム科目	35
2.3.2. 特別セミナー	39
2.3.3. ワークショップ・シンポジウム	41
2.3.4. 協定校訪問、協定校主催の催し	48
2.3.5. 協定校からの働きかけ	52
2.4. 日本語教育領域	56
2.4.1. コンソーシアム科目	56
2.4.2. ワークショップ・シンポジウム	58
2.4.3. 協定校訪問	61
2.5. 本事業に先立って行われたコンソーシアム活動	63
第 3 章 事業成果	67
3.1. 事業成果の公開	67
3.1.1. 本事業の Web ページ	67
3.1.2. 協定校による広報活動	70
3.2. 研究成果の公開	73
3.2.1. Nanzan Linguistics, Special Issues (研究報告書)	74
3.2.2. 国際学会での発表	81
3.3. 本事業に関わる公刊論文、口頭発表一覧	90
3.3.1. 南山大学院生・若手研究者の公刊論文	90
3.3.2. 南山大学院生・若手研究者の学会/ワークショップでの口頭発表	92
第 4 章 評価、総括、展望	97
4.1. 外部評価	97
4.2. 総括と展望	103

第1章 概要

南山大学は、キリスト教的世界観を建学の理念とし、「人間の尊厳のために」を教育のモットーに掲げて、1949年に発足した。本学は当初から国際性の涵養と国際的貢献を教育・研究活動の中心に据えていたが、特に2004年4月の大学院研究科改組において人間文化研究科を設置した際、人間性の本質の追究と国際的に活躍しうる人材の育成をその主要な目的とした。本事業を遂行する言語科学専攻においても、言語研究を通してこの目的を実現することを目指している。

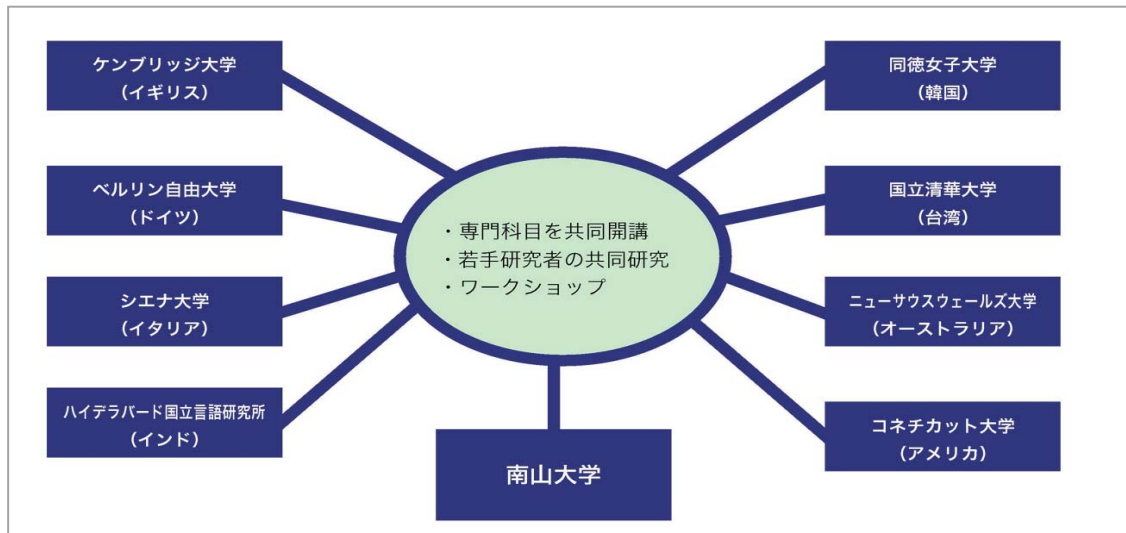
言語科学専攻は、言語理論および言語習得論の二領域において研究者を養成している。この二領域の大学院教育では、知識や研究方法を修得させるだけではなく、国際共同研究に積極的に参加し貢献する能力を培うことが特に重要である。

理論言語学は、個別言語の詳細な研究を基礎として、国内外の研究者との協力の下に比較言語研究を行い、人間言語の普遍的な文法を解明することを目的とする。先端的な研究において広く仮定されている言語理論がヨーロッパ言語の研究に基づいて形成されてきた経緯があり、普遍文法の解明という目的のために、類型的に極めて異なる日本語研究からの貢献が大いに期待されている。こうした状況にあって、日本語と他言語との比較を通して一般言語理論の発展に寄与し、その成果を国際共同研究の中でさらに深めていくことができる若手研究者の養成は急務である。第二言語習得論としての日本語教育学においても、事情は同様である。日本語習得研究を基礎としつつも、日本語教育、英語教育等の枠を超えた第二言語習得論の発展に寄与することができる若手研究者の育成が必要であり、異なる母語話者による日本語習得の過程を明らかにすることにより、外国語習得の一般的メカニズムの解明に独創的な貢献をすることが期待されている。本事業は、こうした国際的要請に応えうる研究者を日本の地において育成するために、2006年に発足した。

言語科学専攻では、本事業開始前から、一般の研究科目に加えて、国際的に活躍する研究者が共有すべき知識と方法論を教授する概論科目群を充実させ、さらに研究を国際的に展開する上で必要となる英語運用能力を身につけさせるための科目群を配置して、英語による論文作成とプレゼンテーション能力の涵養に努め、カリキュラムの整備を進めてきた。また、言語学研究センターを中心として国際共同プロジェクトを展開し、数多くの国際的なワークショップを開催して研究者間の国際的ネットワーク作りに務めてきた。本事業は、この取り組みをさらに発展させ、大学院生に国際共同研究のインターンシップ的訓練を受ける機会を



提供するものである。具体的には、(1) 先端的研究と研究者養成において指導的な役割を担う海外8大学の言語学、日本語教育プログラムとコンソーシアム協定を締結し、(2) 協定校の教員と若手研究者が参加して、国際共同研究のインターンシップ的訓練を行うコンソーシアム科目を専門科目として開講し、さらに、(3) 学生の研究指導にも協定校教員が協力してあたるシステムを構築して、国際的な連携に基づく研究者養成プログラムを設立した。



本事業の中心となるコンソーシアム科目は、下に示すように年度毎に3~4科目(6~8単位)、合計7科目開講された。テーマに応じて協定校から教員と若手研究者を招聘して、協定校と本学の教員が共同で講義を担当し、南山大学の大学院生は招聘された協定校の若手研究者と共に講義に基づいて共同研究を遂行した。その成果は講義終了後のワークショップにおいて発表され、参加者から研究をさらに発展させるための貴重な示唆を受けることができた。

多くはその後論文としてまとめられ、研究報告書(*Nanzan Linguistics*)に掲載されたが、国際学会で発表されたものも少なくない。(詳細は第3章を参照)しかし、本事業の最大の成果は、本学の学生が、自発的に研究課題を提案して協定校に働きかけ、日常的に協定校の若手研究者と連絡を取り合っており、積極的に国際的共同研究を行うようになったことであろう。

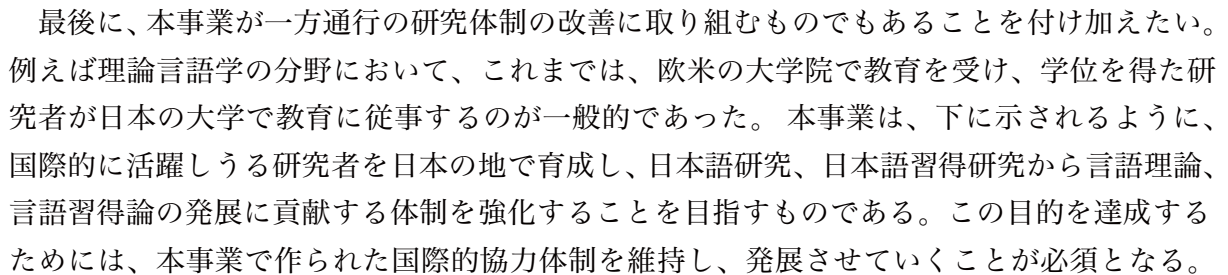
第1回	平成18年(2006年)9月11-14日
	『演算子の移動と解釈』【国立清華大学】
第2回	平成19年(2007年)2月1-3日
	『接触場面研究』【ベルリン自由大学】
第3回	平成19年(2007年)2月16-20日
	『言語習得研究と普遍文法』【シエナ大学・コネチカット大学】
第4回	平成19年(2007年)6月22-26日
	『極小理論の諸問題』【コネチカット大学】
第5回	平成19年(2007年)8月2-4日
	『認知・言語・文化・コミュニケーションの日本語教育』【同徳女子大学校】
第6回	平成19年(2007年)9月17-19日
	『項構造と機能範疇』【ケンブリッジ大学・ハイデラバード国立言語研究所】
第7回	平成20年(2008年)1月31日-2月2日
	『学習者の自律を育てる日本語教育』【ニューサウスウェールズ大学】

近年、北米、ヨーロッパの言語学プログラムでは国際化が進み、その中で独創的な研究がなされている。右下の表は、アメリカ・マサチューセッツ工科大学言語学プログラムとコネチカット大学言語学科の教員の出身国を示したものである。様々な地域から教員が集まって、国際的な環境を作り出していることを見ることができる。こうした先端的な研究機関では学生の国際化も進み、多様な言語を母語とする教員・学生が大学院組織を構成していることから、日常的に言語比較を伴う共同研究プロジェクトを遂行することが可能になっている。本事業は、協定校とのコンソーシアム科目の開講、ワークショップの開催、

国際共同研究の実施を通して、日本において、同様の国際的かつ先端的な研究環境を作り出そうとするものであったが、その目的は達成されつつある。また、本学での事業に加えて、協定校のうち5校が合同セミナーや合同ワークショップを独自に開催し、学内外の注目を集めた（詳細は2.3.4 および2.3.5を参照のこと）。本事業は、日本の大学院教育の国際化に貢献するばかりでなく、国外に対しても大学院教育のモデルを提示することになったといえよう。本事業の具体的な内容、成果は本報告書の第2章、第3章で報告する。

マサチューセッツ工科大学 (言語学プログラム)		コネチカット大学 (言語学科)	
アメリカ	9名	アメリカ	3名
ドイツ	2名	カナダ	1名
ルーマニア	1名	ドイツ	1名
イスラエル	1名	オランダ	1名
ギリシャ	1名	イタリア	1名
ハイチ	1名	イスラエル	1名
日本	1名	セルビア・モンテネグロ	1名

最後に、本事業が一方通行の研究体制の改善に取り組むものでもあることを付け加えたい。例えば理論言語学の分野において、これまでは、欧米の大学院で教育を受け、学位を得た研究者が日本の大学で教育に従事するのが一般的であった。本事業は、下に示されるように、国際的に活躍しうる研究者を日本の地で育成し、日本語研究、日本語習得研究から言語理論、言語習得論の発展に貢献する体制を強化することを目指すものである。この目的を達成するためには、本事業で作られた国際的協力体制を維持し、発展させていくことが必須となる。



2008 年度以降は、南山大学を本部としつつ、全協定校が持ち回りでイベントを開催し、本事業の内容を継続して実施していくことが合意されている。上述したように、すでに協定校が独自に合同セミナーや合同ワークショップを開催し始めており、協定校間の協力体制は確実に発展していくものと思われる。本学も、2008 年度以降、言語科学専攻と言語学研究センターが協力して年に 1～2 科目のコンソーシアム科目を開講する予定である。

[南山大学事業参加者(アルファベット順)]

教員

言語学領域	阿部 泰明	日本語教育領域	鎌田 修
	青柳 宏		坂本 正
	有元 将剛		
	村杉 恵子		
	斎藤 衛		
	鈴木 達也		

大学院生

言語学領域	青野 ますみ	日本語教育領域	坂大 京子
	富士 千里		Won Kyong Maria Choe
	伊藤 敦司		古田 一恵
	加太 良枝		服部 真子
	溝口 大地		徐 毓瑩
	水嶋 展子		板橋 千恵
	村井 (中谷) 友美		川崎 直子
	新村 正人		小峠 友美
	野路 文紗子		久我 瞳
	篠原 道枝		松本 恭子
	須川 精致		宮田 麻美
	瀧田 健介		尾沼 玄也
	上田 平安		了戒 直江
	渡邊 恵理子		齊藤 朗子
	矢野 敬子		齊藤 一夫
	橋本 知子 (研修生)		鈴木 千晶
	浅田 裕子 (科目等履修生)		豊田 奈津
	原口 智子 (科目等履修生)		渡邊 恭子
			山崎 紀子
			横沢 友乃

スタッフ

藤井 友比呂
川村 知子
見上 豪
太田 幸司
高木 智代

[協定校事業参加者]

<言語学領域>

ケンブリッジ大学	教員：	Ian Roberts	
	若手研究者：	Theresa Biberauer Marios Mavrogiorgos Marc Richards	Evangelia Daskalaki Glenda Newton Edward Wilford
国立清華大学	教員：	Yueh-Chin Chang Wei-Tien Dylan Tsai	Tzong-Hong Jonah Lin
	若手研究者：	Liching Livy Chiu Chen-Hsiu Grace Kuo Hui-Chin Joyce Tsai Chung-Yu Barry Yang Xin-Xian Rex Yu	Ting-Ting Christina Hsu Chao-Lin Li Chuan-Hui Ally Weng Shih-Chi Stella Yeh
ハイデラバード 国立言語研究所	教員：	R. Amritavalli P. Madhavan	K.A. Jayaseelan
	若手研究者：	Tasneem Firdaus Ali M. T. Hany Babu Mythili Menon Madhavi Gayathri Raman	M. Keerthi Azad Vineet Chaturvedi Deepti Ramadoss Paroma Sanyal
コネチカット大学	教員：	Željko Bošković William B. Snyder	Diane Lillo-Martin Susanne Wurmbrand
	若手研究者：	Duk-Ho An Jeff Bernath Natalia Fitzgibbons 田口 茂樹 Natalia Rakhlin	Ana C.P. Bastos Jean Crawford 澤田 剛 田中 拓郎 Sandra Wood
シエナ大学	教員：	Adriana Belletti	Luigi Rizzi
	若手研究者：	Elisa Bennati Giuliano Bocci Irene Franco Vincenzo Moscati	Giulia Bianchi Cristiano Chesi Simone Guesser Irene Utzeri

<日本語教育領域>

同徳女子大学校	教員： 李 徳奉	
	若手研究者： 張 恵貞	張 栄花
	金 秀映	金 璇姫
	倉持 香	水口 里香
	西岡 麻衣子	
ニューサウス ウェールズ大学	教員： トムソン・木下 千尋	
	若手研究者： 加藤 稔人	尾島 ヴァンダメイ 幸香
	大原 哲史	武田 春子
ベルリン自由大学	教員： Irmela Hijjya-Kirschner	山田ボヒネック 頼子
	若手研究者： Berthold Frommann	三輪 聖
	Jeannette Schueler	

以上は、本学でのイベントに参加した本学および協定校の教員と大学院生、本事業のスタッフであるが、本事業の実施には、他にも多くの方々の協力があったことを付記する。本事業は、本学の教職員、言語学研究センター非常勤研究員、ならびに協定校の多くの教職員、大学院生に支えられている。また、本事業の立案・計画にあたっては、当時人間文化研究科運営委員であり、現在は立命館アジア太平洋大学教授の近藤祐一氏、教育・研究支援事務室長（当時）の大宮則彦氏、同室係長の藤田哲也氏の職務の域を大きく超える献身的なサポートがあった。